『津田塾大学紀要』第 55 号（2023 年）89-105 頁

ガリシア語における「自動詞 ir ＋不変化不定詞」の表現に関する考察

浅　香　武　和

はじめに

ガリシア語において、未来の行為を言及するための動詞的表現は、総合的（形態的）未来（falarei 私は話そう）と分析的未来「自動詞 ir ＋不変化不定詞」（vou falar 話そう、話すところだ、話すつもりだ）の迂言法表現がある。ガリシア語には、不定詞は変化しない不定詞と屈折する不定詞があるため、ここでは不変化不定詞という用語を使用する。

この両者の形態は、未来性の意味を伝えるものであるが、二つは交換可能であるとは言えない。「自動詞 ir ＋不変化不定詞」の表現は迂言法であり、中世ガリシア語から続くものであるが、19 世紀末から 20 世紀初頭のガリシアの文芸復興期に現れた作品には、カスティーリャ語の影響（カステラニスモ）とされる用法が見受けられる。

小論は、中世ガリシア語から現代ガリシア語にいたるまでの文学作品から、この迂言法について、未来性を表すものなのか、または意図性を表すものなのか、それとも迂言法ではないと考えるか、さまざまな観点から分析を試みたい。

I　辞書と文法書の記述

ガリシア学士院（REAL ACADEMIA GALEGA:RAG）の記述をみると *Diccionario da Real Academia Galega*（1998:680）には次のように記されている。Ir+inf. の項目に、1.Movemento 動き :**Vai abri-las** ventás. 窓を開けよう。**Foi caer** ó pé duns bocois. 彼は樽の傍で倒れた。2.Atención 関心を引く :Dixo

que **ía chamar** cando chegase. 着いたら電話するように彼は言った。3.Futuro inmediato 即時未来 : Parece que **vai chover**. 雨が降りそうだ。**Imos chegar** tarde. 遅刻しそうだ。

文法書については、RAG の発行するものは現時点では存在しないが、アカデミア正会員でガリシア語研究所（Instituto da Lingua Galega: ILG）文法研究班の所員が著した詳解な文法書をみると次のように示している。Álvarez, Rosario e Xove, Xosé: *Gramática da lingua galega*. Vigo, Galaxia. 2002. pp. 356-357. この文法書は、先行研究 Santamarina（1974）, Rojo（1974）を精査して、新たに「ir+ 不変化不定詞」の迂言法の概念をまとめたもので、未来の時制、即時性の様相、境界画定の複合的な要素をあげている。構造上、形態的に迂言的であるのか否か、またはコンテクストから解釈して考察する余地があるとしている。

a）即時未来性の時間的な迂言法として使われるが、非迂言法とも捉えられる。

Imos tomar un café para nos espelir. 目を覚ますためにカフェを飲もう。置き換えると **Imos toma**lo nese bar. Tomámolo nese bar. と同意である。さらに迂言法でないとする次の文とも同意であるとしている。Imos tomalo a ese bar. Imos a ese bar（a）tomalo.

Dixo que **ía saír** daquela. その時出かけようとしていたと彼は言った。Sairía a aquela hora. と置換できる。または差し迫った様相を表す : A aquela hora estaba a punto de saír. その時刻には出かけようとしていた。

この迂言法においては、次に起こること posterioridade は漸進性 progresividade と意図性 intencionalidade が一体化している。すなわち、posterioridade は主語の意志として生じ、話し手一人称複数と一致して意図性が感じられる。posterioridade の意味は直説法未来形と過去未来形より近く感じる。また posterioridade が切迫したことを表すために頻繁に使われるが、近似性と混同する恐れがある。アスペクト的状態の即時性とは異なる。即時性の意味で、ある瞬間に事件が実現される局面にある。すなわち、Sempre me interrompen cando **vou ver** unha película na tele. 私はテレビで映画見ようとするとき、いつもじゃまされる。そして、次に起こることが切迫した状況にあるとき、出来事が近いうちに実現される未来に集中する : **Vou**vos **dicir** unha cousa... お前たちにひとつ言おう。明らかに、区別することは多くの場合はっきりしているが、その解釈は別の意味があるかもしれない : vai chover 雨が降りそうだ。この文は、chove ～ choverá dentro de nada 今にも雨が降る～降りそうだ。または、この様子では雨になりそうだ agora ten pintas de que isto acaba en via の

意味になる。

使用される時制については、習慣的に直説法現在と不完了過去が使われる。接続法の形態も可能であり、特別な環境では直説法未来形と過去未来形が使われるが未来の意味はない。直説法完了過去形と大過去形も使われる、としている。

Sabes que **vou facer** contigo? ぼくが君としようとすることがわかるかい。**Vou**te **deixar** aquí e xa ti mirarás de amañarte. お前をここに残しておこう、そうすれば自分ですることがわかるだろう。Que **vai ser** de min se ti me faltas? もし私がいなければ、私はどうなるんだろう？**Vai nevar** na fin de semana. 週末に雪が降るだろう。Os accidentes **van baixar** moito con estas medidads tan drásticas. 事故はこうした徹底した対策でかなり減るだろう。Negouse a toma-la menciña que lle **ía cura**-la febre. 彼は熱に効く薬を飲もうとしなかった。Comunicáronlles que **ían acturar** nas festas da Ascención. 昇天祭に演じようとするものが知らされた。 Ignoraba que non **vaia chegar** ata dentro de quince días.15日以内に届くとは知らなかった。 Non **irás dicir**llo ti, non? 彼にそんなこと言うなよ。

b）未来の切迫した状況（アスペクチュアルなもの）

助動詞 ir を使い、切迫した状態の未来性を予測するが、即時性は近接する未来と区別するのは難しい。直説法完了過去と大過去の時制の使用は少ない。Sempre aparece alguén a mercar algo cando **vou pechar**. 私が店を閉めようとするときに、いつも誰かが何かを買いに現れる。Cando chamaches **ía saír**. お前が電話した時、出かけようとしていた。Cando **fun acende**-lo ordenador decateime de que non había luz. 私はコンピュータのスイッチを入れた時、灯りが点いてないのに気が付いた。

c）境界画定的迂言法 demarcación（強調および際立たせる迂言法）

予期しない出来事が存在することを示す迂言法。未来を予測する助動詞 ir が迂言法として使用される。したがって、より後の事実と即時性の形態が一致する。ある環境では、即時的未来または未来の切迫した状況と混同するおそれがある。未来に向けることができるが、次に続くことではない。そして切迫した状態に対して、プロセスの終わりに到達するまで進行することを示す。このように境界画定の事実が突然生じることを予想しない。時制は直説法完了過去・大過去が容認できるが、他の時制も可能である。**Foise cerra**-la porta xusto cando estaban todos dentro. みんなが中にいる時、ちょうど扉が閉まった。Non lle **foi dar** un bico á vista de todos! みんなの前でキスしなかった。

Mira ti quen **vai** ～ **foi falar**. 話そうとする～話そうとした人が誰だか確かめて。Ten coidado, que aínda te **vas mollar**. ずぶ濡れになるから、気をつけな。

このように要約紹介することができるが、次のことを考えてみたい。**Vou mercar** unha casa.（家を一軒買おう～買うつもりだ。）の文において、物理的また物質的な運動、意図性または未来性の表現として解釈できる可能性があるので、迂言法か否かを識別するのは難解であると考える。ただし動詞 ir が別の運動の動詞 correr, marchar などに表現を歪めずに交換可能であれば、その時は、その構造は迂言法ではない。すなわち、物理的な運動が存在するからである。もしその可能性がなければ「ir+ 不変化不定詞」は意図性、または未来性を示し迂言法となる。すなわち E pois aquí está, **vou**lle **amostrar** unhas gorriñas novas.（ええと、ここにあるよ。あなたに新しい帽子を見せてあげよう。）

ガリシア語は、未来性を表す不完了過去の時制の迂言法「ir+ 不変化不定詞」（ía ler 読書しようとしていた）と未完了のアスペクト的な迂言法「ir a+ 不変化不定詞」（ía a ler cando se produciu o accidente 事故が起きた時、読書していた）の違いを区別する必要がある、という研究者 Freixeiro Mato（2000:400）の意見もある。「ir a+ 不変化不定詞」の構造は、a+ 不定詞が現在分詞と同価の現在分詞的不定詞と捉えるので未完了のアスペクト的な迂言法と考える。この構造はカスティーリャ語の言語干渉として前置詞 a が挿入される迂言法の形式とも混同される。すなわち e por vieiros moi desemellantes imos esmorecer e a nos irmandar nas mesmas ribeiras.（私たちはかなり違った道で勇気をくじかれそうだ、そして同じ場所で私たちは親しくなっていく。）

次のような場合、すなわち、未来を表す標識がない時と物理的または意図的な運動を示さない時。動詞 ir が運動の意味を維持する時に他の動詞 correr, marchar などに代替可能な時。このような場合は迂言法とは扱わない。Fostes comprar a roupa de inverno? ― Non, só fun eu mirar escaparates.（君たちは冬服買いに行ったのですか？―いいえ、ウィンドショッピングしただけです。） 浅香（2018:165）

II　カステラニスモの迂言形式「ir a + 不変化不定詞」について

この構造はカスティーリヤ語の未来を表す迂言形式で、ガリシア語学ではカステラニスモ（カスティーリャ語主義またはカスティーリャ語の干渉）と

呼んでいる :imos a xogar, foron a beber, vas a tardar などの形式は、imos xogar 遊ぼう、foron beber 彼らは飲んだ、又は、彼らは飲みに行った、vas tardar お前は遅れるだろう、とすべきである。助動詞 ir と不変化不定詞をつなぐ前置詞 a は使用されないのが正しい。

スペイン語についてみると、語法的には、ir が助動詞として働くのは原則で非完了時制、すなわち直説法現在、未来、線過去、接続法現在、過去、命令法だけで、その他の時制の場合には ir は一般動詞としての意味を維持する、とある。白水社『スペイン語大辞典』(2015:1266).

RAG (1998:680) の辞書を見ると、ガリシア語では前置詞の a を使わずに「ir + 不定詞」の形式を使い、未来または進行を表現するために頻繁に使われる、とある。とくに時制については明記していないが foi caer ó pé dos bocois 彼は樽の傍に倒れた、の例文もある。

一方、Hermida (1998:166) によると、ガリシアの日刊紙においてカステラニスモの不正確な用法があることをあげている : foi a parar 彼は止めた、又は、彼は止めに行った ; imos a recoller da totalidade do mesmo 同じもの全部を回収しよう ; van a destinar 彼らは向かう予定だ、など前置詞 a を挿入した例が散見している。筆者が見つけた例に、Non só a palabra escrita vai a estar presente nas actividades. 文書だけが活動に存在するのではない。(Biblioteca de Galicia, 2021.5.7)

前置詞 a の挿入は、カステラニスモと考えることは可能である。例えば、Agora vouche a contar un conto. 今、お前に一つ話しをしよう。さらに、En poucas semanas vai a ser derrubado. 数週間で壊されるだろう。この 2 つの文は、明らかにカステラニスモであり、正しいガリシア語にすると Agora vouche contar un conto. En poucas semanas vai ser derrubado. である。では、次の文はどうだろう。Fomos a velo ó hospital. 私たちは病院に彼を見舞いに行った。形式的にはカステラニスモの迂言法に見えるが、迂言法ではない。私たちは、彼に会うために入った、と言うことで、動詞 ir の直説法完了過去一人称複数形 fomos を助動詞とは考えず、独立した運動の意味の自動詞と考える。

次に、ラモーン・カバニージャス (Ramón Cabanillas) がカスティーリャ語の構造を使用した例を見てみたい。(　) は規範ガリシア語の表現形式。浅香 (2021:164-166) 参照。

Da Terra asoballada, 1926 から採集した用例は、**vai a falar** 話すつもりだ (vai falar) , **ir a falar** 話そうとする (ir falar) , **vanse a cumprir** 実現されるだろう (vanse cumprir)。

これらを単純にガリシア語におけるカステラニスモと考えたいが、Freixeiro Mato（2000:440）によると、ガリシア語では、未来または切迫した状態の迂言形式「ir+ 不定詞」と未完了のアスペクトを表す迂言形式「ir a+ 不定詞」が存在して、両者は区別されるものであると述べている。例えば、**vou falar** 話そう、**ía ler** 読むつもりだった、**ía a ler** cando se produciu o accidente 事故が起きた時、読書していた。こう考えると、未来を表す迂言法はカスティーリャ語の干渉により、近接未来の構造として迂言法の形式要素に前置詞 a の出現を可能にさせたと考える。カステラニスモの形式は RAG によると不正確な用法だと言われるが、話し言葉では頻繁に現れ、同時に書き言葉にも 19 世紀から常態化していった、と説明している。

さらにカバニージャスの作品 *As Romaxes da Franqueira*, 1927 から採集した次の例文はどうだろうか。O señor abade **foi a buscar**. 修道院長は探しに行った、又は、修道院長は探した。A nai **foi a servir** ó Rei. 母は王様に使えるために出かけた、又は、母は王様に仕えた。この文は、動詞 ir はいずれも直説法完了過去三人称単数形 foi であることから、迂言法ではないと判断したい。しかし、Santamarina（1974:147）によると、**Foron caer** a un pozo d' auga. の文では、foron は直説法完了過去の時制であり偶発的に生じたことで、この形式の文を書き換えると、Deuse o caso de que caeron nun pozo d' auga. 彼らはとうとう水溜に落ちた、という意味になることを説明している。Foron a beber の場合は、彼らは飲みに行ったのか、それとも、彼らは飲んだ、の両方が考えられるが、迂言法でないとすれば、彼らは水を飲みに行った、である。

A rosa de cen follas, 1927 から、この迂言法の用例を見るとガリシア語の形式とカステラニスモの形式が混在しているのがわかる。前置詞 a を挿入した要因はなぜなのか分からないが、単純にカステラニスモと理解してもいいが、詩の音節を合わせるために挿入したとも考えられる。Xa sei que **vas a vel**-a! お前が彼女に会うつもりなのは、私はすでに知っている。（IX）; Que lle **vas a facer**? お前は彼女をどう思っているのか？（X）; **vaise** o tempo **a fuxir** 時が早く過ぎ去ってしまう（XV）.

最後に中世ガリシア語において、前置詞 a が挿入された用例を調べると Larson（2019:128）に次のようにある：《Perden seu sén/ aqueles que me **van a demandar**/ quen é mia senhor》誰が我が聖母であるか私に訊ねようとする者たちは言葉を失う。また、筆者が見出した用例は Aquesta menynna **foi a bever**/ ena cequia, e dentro caer/ foi, por que ouve logo de morrer.（*CSM* 133,15）この少女は用水に水を飲みに行って、中に落ちた。この用例は迂言法ではなく、運動

を表すものと判断したい。

III　迂言法の分析

中世ガリシア語のテキスト、近代文芸復興期の作品および現代の作品から採集した「ir+ 不変化不定詞」の迂言形式の用例をあげて検討してみたい。

1. 中世ガリシア語の用例から

13 世紀に編纂された *Cantigas de Santa María*（*CSM*）『聖母マリア頌歌集』および吟遊詩人の *Cántigas* および *Cancioneiros* から用例を検討すると、Larson（2019:127）は、ir（a）+ 不定詞をともなう迂言的表現において、動詞 ir は現在における未来性を表現するか、過去における動作の概念を表すことができる、としている。その例として、次の使用がある。

- E por ela **vou trobar**. *CSM* 300,v.45. そして私は聖母のために詩作しよう。［意図性］
- Perden seu sén/ aqueles que me **van a demandar**/ quen é mia senhor. Fernan Gonçalvez de Seabra,v.16. 我が聖母は誰であるか、私に訊ねようとする者たちは言葉を失う。［未来性］
- E **ides**-mi ora **defender**/ que vos non veja. Vasco Fernandez Praga de Sandin vv.19-20. 今、貴方に会うことを私は禁ぜられよう。［命令］
- **Fui buscar**/ consell'e non o pud'aver. Joan Soarez Somesso v.1. 私は助言を求めに行ったが、それを見つけることはできなかった。［運動］

　この文は ir 動詞が直説法完了過去形であることから、過去における動作である。

　さらに、Mettmann（1972）の語彙集から次の用例を見出すことができる。ir+infinito と ir a+infinito の形式があげられる。

- e demais ta cunnada Elisabeth, que **foi dultar**. *CSM* 1,21. そして、貴方の従妹のイサベルも、疑っていた、［運動］
- que o **foi** end'el **sacar**. *CSM* 3,14. そこに彼を連れ出した。［運動］
- que ll' aquel gaffo traeder **fora bastercer**. *CSM* 5,157. あの指の曲がった背信者は企んだ。［運動］
- Ousadia/ foi d' **irdes tanger**/ meu comendado. *CSM* 11,69. 貴方たちが我に委ねたことは無謀だった。［意図性］　irdes は屈折不定詞二人称複数形 .
- O preste logo **foi**-ss' **erger** e...por **ir** o miragre **veer**. *CSM* 24, 46. 司祭はすぐに

立ち上がり、そして ... 聖母の奇蹟を見るために。[運動]

- Fas un preito: **ir**-t-**ei** por fiador **meter**. *CSM* 25,36. お前はそれをする必要はない。私はあなたに保証人として報いる必要があろう。[未来性]. ir-t-ei は直説法未来形で、対格 te が挿入されている。
- que te **foi deytar**/ en poder do ĕemigo,/ e **vai**-te **degolar**. *CSM* 26,46. お前は敵のもとに身を投げた、だからお前は首を切りなさい。[運動 , 命令]
- mandó-o que **fosse a veer** se fezera. *CSM* 78,41. 伯爵は彼に命じたことを成し遂げたかどうか見に行かせた。[運動]
- Aquesta menynna **foi a bever**. *CSM* 133,15. この少女は水を飲みに行った。[運動]
- E pois entrou en Tolosa, **foi** logo **fillar** pousada. *CSM* 175, v. 15. それからトローザの町に入った、彼はすぐに宿屋を探しに行った。[運動]
- E fillou log' un cuitelo/ e **foi** a mão **cortar**. *CSM* 206, v. 28. 小刀を見つめて、手を切った。[運動]

次の二例は筆者が見出したものを追記する。

- /por un monge, que **rogar** ll' **ia** sempre que lle mostrasse/ *CSM* 103, 7-8. 修道僧は見せてくれように、聖母マリアにいつも祈願しようとしていた、[運動]
- E porend' a Groriosa/ vedes que lle **foi fazer**: *CSM* 103, 12. 聖母マリアに祈願したことに気付きなさい。[運動]

以上の 19 の用例を形態的にみると、「ir+ 不変化不定詞」は 16 例、「ir a+ 不変化不定詞」は 3 例であった。

法と自動詞 ir の時制を分類すると次のようになる。

直説法					接続法	不定詞	
現在	未来	完了	不完了	大過去	過去	屈折	不変化
4	1	9	1	1	1	1	1

コンテクストから用法を分類すると次のようになる。

運動	意図性	未来性	命令
13	2	3	2

2. ガリシア文芸復興期（Rexurdimento）の作品からの用例

2.1 Ramón Cabanillas の作品から採集した用例をあげ検討してみたい。作品は *No desterro*, 1913. *Na noite estrecida*,1926. *A rosa de cen follas*,1926. *Antifona da cantiga*,1951. からである。

・ mais unha costureira i un mozo **foron ver** a carballeira. でもお針子さんと若者がコナラの林を見に行った。

・ cinguiron as espadas e **foron cabalgar**. 迂言法の形式は、直説法完了過去形＋不変化不定詞であり、文意は、彼らは剣を腰につけて馬に乗った、であるから迂言法ではない、と判断したい。しかしながら、Erguinme de novo e **fun pecha**-la porta do cuarto. 私は再び起きて、部屋のドアを閉めた（Álvarez1986:405）。この文を動詞の複合形式において ir は運動の概念を示すだけにすぎないと説明している。一方、Cando **fun acende**-lo ordenador decateime de que non había luz. コンピュータのスイッチを入れたとき、灯りがついてないのに気が付いた（Álvarez 2002:364）。この文では、切迫した状態とすぐ後で起こることを区別することは難しいとしている。助動詞 ir が完了過去および大過去形で使われるのはそれほど頻繁ではないと説明している。

　A rosa de cen follas から、この迂言法の用例を見るとガリシア語の形式とカステラニスモの形式が混在しているのがわかる。（ローマ数字は詩の番号）

・ Non a queiras, corazón, que che **vai custar** a vida.（XXX）心よ、彼女を好きになるな、人生の重荷になるだろう。

・ **voucho decir**.（XXIX）お前にそのことを言おう。

・ que **vas caír**!（XXXII）お前は落ちそうだ。

・ Xa sei que **vas a ve**l-a!（IX）お前が彼女に会うのはすでに私は知っている。

・ Que lle **vas a facer**?（X）お前は彼女に何をするつもりか？

・ **vaise** o tempo **a fuxir**（XV）時は過ぎ行くだろう。

ガリシアの伝承歌を集めた Ramón Cabanillas: *Antifona da cantiga*. 1951. に次のような一節がある。

・ **Funme botar** a dormir a pé da agua.137. 私は水の傍で眠りだした。
この用例は、funme botar と botar a dormir の 2 つの要素が連鎖している複合迂言形式であり、運動の概念を表している。

　追記として、カバニージャスの書簡のうちカスティーリャ語で認めたも

のを検討すると、“… , el Teatro Nacional, antiguo Teatro Tacón, el más importante de la ciudad y **se va a constituír** un edificio para instlarse debidamente” . を見出すことができる。(1910.10.18) Arquivo da Real Academia Galega

2.2 Rosalía de Castro: *Contos da miña terra*.1864. から採集した用例は次の 5 例で、時制は直説法現在形2, 未完了形1, 接続法現在形1, 不変化不定詞 1 である。用法は意志性 2, 未来性 3 である。

・ e que me **vou casare** antes d’ á festa, そして、私はお祭りの前に結婚するつもりだ。
・ O fin trataron de s’**ir deitar**, e á Xan…ついに彼らは寝ようとした、そしてシャンには…
・ Asi pasou un-ha hora longa, en que Xan, content, xa **iba dormir** descoidado, … こうして長い時間が過ぎた、シャンは、満足して、ほったらかしたまま、もう眠ろうとしていた。副詞の xa, agora などが使われると、比較的近いうちに生じることを暗示していると言える。
・Dios, **vou**vos **á decir**te,.. 神様、あなたに言っている… 又は、神様、あなたに言うつもりです…

ここで問題なのがá の用法である。Carré の辞書 (Leandro Carré: *Diccionario galego-castelán*. 1933, 1984, outava edizón, La Coruña.) によると、前置詞 á が運動を表す不定詞を従えるときは現在分詞と同等であるとしている。ガリシア語 Imos á andar = カスティーリャ語 Vamos andando だとすると、この用例は異なることになる。現在のガリシア語学で言うところの現在分詞的不定詞である。同じような表現がロサリーアの作品の中に確認できる。volveu á desir Lourenzo, ロウレンソは再び言った～言い続けた、と考えられる。

・ xa que non querés qu’ eu **vaya durmir** o chan, ぼくが床で眠ろうとするのをあんたは望んでないから、…

3. 現代ガリシア語の文学作品から用例分析

用例を採集した作品は次の小説である。Beatriz García Turnes: *Valdamor*. Vigo, Galaxia, 2001.

・ ―**Vai**me **acabar** vostede coa paciencia. あなたは私に忍耐袋を切らせるつもり。[意図性]
・ ―E como non se **ía prohibir**? で、どうして禁止にならないのか？[同時性]

前もって触れた事実に言及する疑問文の場合は未来性というよりも、むしろ同時性を表す。

- Este **ía ser** o segredo intento. これは秘密の目論みだろう。［意図性］
- ― Espera ― dixolle a Ruth ―, **vou sacar** unhas fotografías.「待って、写真撮るから」とルスに言った。［未来性］
- ― **Vou**no **buscar**. 彼を探そう。［意図性］
- necesitaban máis xeo, **ían traer** unhas olivas,... もっと氷が必要だった、オリーブの実を持って来ようとした、、、［未来性］
- ― Marta quixo **ir beber** á cociña e … マルタは台所で飲もうとした、、、［意図性］
- ― E pensan que **vou dar** eu? ところで私がするとおもう？　［意図性］
- ― o que **ía facer** nese tempo de descan que tiña por idante. 判断するスキャンの時間内にしようとすること。［未来性］
- ― Ó final do día, a psicóloga...**foi**se **despedir** do seu ilustre paciente. 精神科医は傑出した患者に別れを告げた。［運動］
- ― Vostede **vai gozar** de algo parecido a partir de agora. あなたは今からなにか似たことを楽しむんでしょう。［意図性］
- ― Debeu avisarme antes de que **iamos pasar** por tests de veracidade. 真実テストを通過する前に私に知らせるべきだった。［未来性］
- ―e non penso **ir**lles **dicir** algo ós do Consello Superior…最高審議会のメンバーになにかを言うつもりはない。［意図性］
- ― Onde **vai pasar** as vacacións? どこで休暇を過ごすつもりですか。［意図性］
- ― O primeiro que fixo ela **foi pousar** as maletas na entrada e dedicarse a abrir contras e fiestras. 最初に彼女がしたことは、スーツケースを入り口に置いた。［運動］
- ― O máis molesto **fora contestar** a tódas preguntas …最も厄介なことはすべての質問に答えた。［運動］
- ― Por que **se ía namorar** alguén coma Ghulipes …なぜグリペスのように誰かを好きになるの…　［意図性］
- ― Estaban alí a noite en que eu **fun atender** a nena …私は娘の世話をして、夜はそこに皆は居た。［運動］
- ― Se consigo póla Morena, **vou ser** a envexa de todo Valdamor. 私は全バルダモールの嫉妬になるだろう。［未来性］
- ― Non nos dixeras que a amiga que **ías traer** era tan guapa. お前が連れてこよ

うとした女友達はとても美人だとは我々に言わなかった。[未来性]

- ―pero se non trae os permisos **vai ser** imposible. しかし、もし許可を持ってこなければ、不可能だろう。[未来性]
- ―para manter os animais que **imos cazar** ou simplemente fotografar, …狩猟するか、単に撮影する動物たちを管理するために、[意図性]
- ―Adela **foi buscar** outra vez o psicólogo substituto. アデラは再び精神科医を探しに行った。[運動]
- ―A semana que vén terei un permiso para **ir ver** a Ruth. 来週、ルスに会いに行く許可を私はしよう。[意図性]
- ―Si, e **ir vivir** á zona B はい、そしてB地域に住むこと、[意図性]
- ―Tanta présa por **ir ver** a Ruth esa! とても急いでそのルスに会いに行くために。[意図性]
- ―Non cíin que me **fose ocultar** información. 私に情報を隠そうとするなんて信じられなかった。[意図性]
- ―**Vou**te **matar**. Esta vez si que te mato. お前を殺そう。今回は、確かにお前を殺す。[意図性]
- ―Canto tempo máis me **vai ter** coa intriga? さらにどれくらい私に陰謀を企てようとしているのか？ [意図性]
- ―Pero **vou**lle **pedir** algo a cambio. しかし、彼に何か交換するのを頼もう。[未来性]
- ―Se soubise que vostede se **ía empeñar** en revelalos non lle contaría nada. あなたがそれを暴こうと主張するのが、もし知られれば、何も話してはくれないだろうに。[意図性]
- ―o que **ía oír** agora a psicóloga era unha especie de confesión. 今、精神科医の言うことを聞くことは、混乱の種だ。[意図性]
- ―ou se tódalas persoas **van chegar** a un punto en que resulte imposible …または不可能なことになる時点で全員が到着すれば、[未来性]
- ― Pois … en principio **van tartar** de buscar as causas do fenómeno e **van procurar** unha solución. つまり、原則的に現象の原因を探そうとして、解決策を試みるつもりだ。[意図性、意図性]
- ―Tiña desexos de pórse en pé e de **ir abrazar** o seu amigo. 立ち上がって、友人を抱きしめようとする思いがあった。[意図性]

このように直接話法に現れる例が多くみられ、35の用例が確認される。

筆者は、迂言法未来を使用する理由を直接に作者に質問したところ、次のような返答が届いた。「普通、未来を示すために総合的な形態である直説法未来形を使用するよりも、私たちは迂言法の表現をより頻繁に使用します。そして文中にあらわれる Falaremos aló.（そこで話しましょう）という直説法未来形の表現は、Imos falar という迂言法の使用よりも文が据わっていて微妙なニュアンスがあると思います」、と作者は答えている。「Falaremos にすることによって、話す行為が未来に企てるようにしなければならないことよりも、強調の意味合いがある」、と言っている。「この例では、アデラはグリペスが現在ではなく、今、すべて話すことを望んでいるからである。しかし、グリペスはアウガスマナスという場所にいる時に、話す行為を延期させることを望んでいる。ひとつの方法として、接続法現在形の falemos と同等である。もし、迂言法 imos falar（話そう）を使用すると、私たちは未来よりも現在により近い存在を表す。話す行為についてはそれほど自由にはならない。それは時間的距離を強調しなければならない。すべては、言語的に話者そして作者である自分の直観に導かれて述べている。文法書のいうことは、迂言法は近い未来を示すのに受け入れられ、また、かつては直説法未来時制の形態的未来を使用していた領域に拡がっている。」（ガリシア語から日本語訳は筆者による。）

作者からの返答はこのようであるが、文体的効果を狙った総合的未来と迂言法の選択は作者の直感によるところが大であると考える。

この作品から採集した迂言法の用例を法と時制から分類すると、次のようになる。疑問文 1 例は同時性を表す。

直説法				接続法		不定詞
現在	不完了	完了	大過去	現在	過去	不変化
1 4	9	4	1	0	1	6

用法を分類すると次のようになる。

運動	意図性	未来性
5	20	9（1）同時性

4. SNS（Social Networking Service）にみる迂言形式「ir+ 不変化不定詞」の用例（Facebook、新聞、雑誌、手紙から用例抽出）

- Farei un percorrido nunca antes visto pola miña traxectoria na videopoesía. Vai ser case conmovedor para min. Farei dende verdadeira arqueoloxía sentimental e … 私にはそれは感動的なものになるだろう。（Yolanda Castaño, 2021.3.17）［未来性］
- **Vai ser** tan emocionante lembrar a Xela Arias este vindeiro sábado. 来る今週の土曜日シエラ・アリアスを回想することはとても感動的なことになるだろう。（Yolanda Castaño, 2021.5.5）［未来性］
- En Cambre, era habitual **irse bañar** á praia da Marisqueira. マリスケイラの海岸に海水浴に行くのが習慣だった。（Xosé Eixo, Vivir o galego, 2021.3）［運動］
- Non **vou dar** explicacións por falar en galego.（Vivir o galego, 2021.4.13）ガリシア語で話すことに説明はしない。［意図性］
- **fun dar** co libro de Música de1-2, do Seminario. 神学校で音楽 1-2 の本に僕は出あった。（Alfonso Eiré, 2021.3.29）［運動］
- Os galegos **imos ter** novo Delegado do Goberno. 我々ガリシア人は政府の新しい代議員をもとう。（Alfonso Eiré, 2021.3.29）［意図性］
- O seu respeto polos cidadáns **vaise comprobar** polo idioma que use. 市民にたいする尊重は、使用する言葉により証明されるだろう。（Alfonso Eiré, 2021.3.29）［未来性］
- pero creo que aos concellos hai que **ir traballar**, non **pasear** as siglas. しかし、市役所に働きにいかなければならない、略語を見せるのではない。（Alfonso Eiré, 2021.3.29）［意図性］
- iniciamos … que a familia Castro-Murguía **fose vivir** á cidade herculina. カストロ - ムルギーア家族がヘラクレスの町に住めるように…我々は着手した、fose は接続法未完了過去形であるから、迂言法は可能と考える。ロサリーア・デ・カストロ博物館ブログ（2021.2.24）［意図性］
- Onde o sol declara a súa derrota e **vai durmir**. E eu, a sonar. 太陽が進む道を示す所に、人は眠る。そして、私は夢を見る。（Fransico Castro, 2021.4.6）［未来性］
- **Vou**no **pensar** un pouco e despois contéstoche. 私はそのこと少し考えます。（García Turnes, 2021.4.8）［意図性］
- Hoxe **vou facer** propaganda dunha non galega. 今日はガリシアのものでない宣伝をしよう。（X.M.Lema, 2021.4.14）［意図性］

・ Por este camiño **ides chegar** a el. この道を行けば、お前たちはそこに着くだろう。(X.M.Lema 2021.4.2)［未来性］
・ É un pracer saber que **vas vir** por estas terras. あなたがこの地に来ることを知って嬉しいです。(Carta de Carme Villasol, 2005. 7)［未来性］
・ **Vai ir** introducido en varios idiomas ademais do galego. ガリシア語のほかにさまざまな言語を導入しつつある。(Héitor Picallo, 2021.4.22)［未来性］
・ **Vou ir** este xoves a Cambados a dar a unha conferecia ó Instituto Asorey. 今週の木曜日にアショレイ高校で講演するためにカンバードスに行くつもりだ。(F. Fernández Rei, 2021.5.10)［意図性］
・ … ,que **se vai poder ver** no Museo Cabanillas, カバニージャス博物館で見られるだろう、(*Diario Nós*, 2021.5.10)［未来性］
・ Se se salva Galicia, **vaise salvar** o idioma. E sen o galego, que **vai ser** Galicia? ガリシアが生き残れば、ことばも生き残るだろう。そしてガリシア語なしでは、ガリシアはどうなるだろうか？(*Diario do Salnés*, 2022.8.27)［未来性］

これらの用例を分析すると、時制は直説法現在形 14 例、完了過去形 1 例、接続法過去形 1 例、不変化不定詞 2 例。用法は未来性 10 例、意図性 7 例、運動 1 例である。

ガリシア自治州に隣接するアストゥリエス自治州の準公用語アストゥリエス語による迂言法の表現を見ると、次のようである。

・ El mayor eventu editorial a nivel mundial, **va tar** dedicáu nel 2022 a España y la lliteratura n' asturianu y gallego-asturiano **va tener** presencia na feria.（asturies.com 2021.4.8）世界規模の出版社の最大のイベントは、2022 年にスペインに向けたものになるであろう、そしてアストゥリエス文学とガリシア・アストゥリエス文学はフェアに参加するだろう。［未来性］
・ el domingu **va reactivar** el zarru perimentral y les midíes de nivel d' alerta 4+.（2021.4.7）日曜日、試験的閉鎖は再び開始するだろう、アラートプラス 4 対策のために。［未来性］
・ El vienres **va espublizase** la resolución con tolos detalles sobre l' escenariu nuevu de midíes ……（2021.4.7）金曜日、対策の新しいステージに関するすべてのデータから回答が発表されるだろう。［未来性］
（espublizar+se 不定詞に再帰代名詞が付くと、不定詞の -r が消失する）
・ La vacuna d' Astra Zeneva **va alministrase** namái a persones d' ente 60 y 65 años.（2021.4.7）アストラ・ゼネカのワクチンは 60 歳から 65 歳の人だけに投与

されるだろう。[未来性]

・ Les terrace **van tar** abiertas hasta les 23 hores dende'l sábadu y los interiors, hasta les 21.（2021.4.7）テラス席は土曜日から午後 11 までオープンしている、室内は午後 9 時まで。[未来性]

・ Cangas del Narcea **vei dar** dous premios de 500 euros a los meyores cuentos curtios escritos n' asturianu-Formientu.（2021.4.14）アストゥリエス語カンガス地方の方言 vei=va（不定詞 dir の直説法現在三人称の活用形）カンガス・デル・ナルセア市は、アストゥリエス語で書かれた最優秀短編物語二篇に 500 ユーロを与えようとしている。[意図性]

時制は全て直説法現在形 7 例、用法は未来性 5 例、意図性 1 例である。

おわりに

以上の考察から、次のようにまとめることができる。

1. 中世ガリシア語では様々な時制と用法が見られるが、現代ガリシア語の作品からは直説法現在形と未完了過去形が多く使われ、意図性と未来性の用法が多くみられる。
2. ガリシア語における迂言法を考える時、「ir+ 不変化不定詞」という表現形式にこだわらず、文のコンテクストから判断する必要があると考える。現代ガリシア語では、迂言法の形式は基本的に口語で頻繁に使われている。それが書き言葉の領域に拡がっている。現代の話し言葉および書き言葉では、未来性を表現するために直説法未来形の形態より迂言法が好まれている。
3. この迂言法には意図性が存在し、そして比較的近い未来に実現される方向に向かう精神的な運動または精神的な意向が存在することから、口語ガリシア語に頻繁に使われると言えるが、書き言葉にも拡がり **vou facer** eu neste caso この場合私が行おう（1989, A.S.）; **vanse mostrar, vai ser** aínda Acción Galega, **vai construír** 示されるだろう、今でもガリシア行動党であろう、建設するであろう（2009, Pena）; **vai asumir** el directamente a creación do estado de opinión linüística 彼は言語的意見から国の建設に直接責任をとるだろう（2021, X.H.C.）の用例を見出すことができる。一方では、ガリシアの口語カスティーリャ語に **voy coger** 僕はとろう（16 歳、サンティアゴ、1998）というガレギスモの現象が生じている。(　) は雑誌に書かれた年代と著者名。

4. 言語的には話者そして作者である自分の直観に導かれて述べている。文法書の示すことは、迂言法は近い未来を表すのに受け入れられ使用されるが、直説法未来時制の形態的未来を使用していた領域に迂言法は拡がっている、と判断できる。文体的効果を狙った場合、総合的未来か迂言法の選択は話者の直感によるところが大きいと考える。

参考文献 Bibliografía

文学作品

Alfonso X: *Cantigas de Santa Maía*. Edición de Walter Mettmann, Madrid, Castalia, 3 vols. 1986, 1988, 1989.

Cabanillas, Ramón: *Poesía galega completa*. Vigo, Xerais, 2009.

Castro, Rosalía de（1864）: *Contos da miña terra*. Versión de Takekazu Asaka. Toquio, DTP Publishing, 2014.

García Turnes, Beatriz（2002）: *Valdamor*. Vigo, Galaxia.

研究書目

Álvarez, R., Monteagudo, H. e Regueira, X. L.（1986）: *Gramática galega*. Vigo, Galaxia.

Álvarez, R. e Xove, X.（2002）: *Gramática da lingua galega*. Vigo, Galaxia.

Freixeiro Mato, Xosé Ramón:（2000）*Gramática da lingua galega, II Morfosintaxe*. Vigo, Edicións A Nosa Terra.

Hermida, Carme（1998）:«Algunhas consideracións sobre o galego da prensa. A morfosintaxe», in D. Kremer（ed.）: *Homenaxe a Ramón Lorenzo*, vol.2, Vigo, Galaxia. 615-631.

Larson, Pär（2000）: *A lingua das cantigas*, Gramática do galego-portugués. Vigo, Galaxia.

Mettmann, Walter（1972）: *Afonso X, O Sabio. Cantigas de Santa Maria. vol. IV Glossário*. Editadas por Walter Mettmann. Acta Universitatis Coninbrigensis. Coimbra.

Real Academia Galega（1998）: *Diccionario da Real Academia Galega*. A Coruña. 2ª. edición.

Rojo, Gullero（1974）: *Perifrasis verbales en el gallego actual*. Anexo 2, Verba. Universidade de Santiago de Compostela.

Santamarina, Antón（1974）: *El verbo gallego*. Anexo 4, Verba. Universidade de Santiago de Compostela.

浅香武和（2018）:『新ガリシア語文法』科研費報告書、栄文社。

浅香武和（2022）:「カバニージャスの作品に見るガリシア語の言語分析」『津田塾大学紀要』54, 145–175.